

住民の「自主活動」による子育て家庭の居場所づくり —韓国釜山市の盤松洞の事例を通して—

Creating a Place for Child-Rearing Families Through the Independent Activities of Residents

- Using the Example of Bansong-dong, Busan Metropolitan City, South Korea -

崔 敏 奎
MinGyu CHOI

旭川大学短期大学部 幼児教育学科

This paper reveals the reality of efforts to create a place for child-rearing families through the independent activities of residents using the example of Bansong-dong, Busan Metropolitan City, South Korea. The residents of Bansong-dong created a community of practice where they could share their common desire to change the local environment for child-rearing- a common issue they were aware of. In addition to this, in their efforts to change the local child-rearing environment, they sought to beautify the said environment through activities that can be participated in as a family, such as “maeul murals” and “maeul family trips” (literally, village murals and village family trips), as well as building relationships where fellow child-rearing families support each other. Moreover, while seeking cooperation from various bodies such as local kindergartens and universities and through joint efforts from residents, they built a library, a place for child-rearing families, and developed beyond “independent activities” within the community for practice into “independent activities” in cooperation with various bodies. Local childcare workers were also involved in this process and aided as individual residents. The fact that these activities that greatly changed efforts towards creating a place for local child-rearing families and the local child-rearing environment itself developed into “independent activities” of the residents is of great significance.

要旨

本稿は、韓国釜山市にある盤松洞の事例を通して、住民の「自主活動」による子育て家庭の居場所づくりの活動実態を明らかにしたものである。盤松洞の住民は、地域の子育ての環境を変えたいという共同の問題意識を共有できる実践コミュニティを作り、家族単位で参加できる「マウル壁画」や「マウル家族紀行」等の活動を通して地域の子育て環境の美化や子育て家庭同士で支えあう関係を構築するなど、地域の子育ての環境を変えていった。そして、地域の幼稚園や大学といった諸団体との連携や住民の協力を得ながら、子育て家庭の居場所である「図書館」を建てる等、実践コミュニティ内の「自主活動」を超え、諸団体と連携を図る「自主活動」として展開をみせていた。特に、このプロセスから地域の保育者も一人の住民として関わっていった。地域の子育て家庭の居場所づくりや地域の子育ての環境を大きく変えたこれらの活動は、住民の「自主活動」として展開したところに大きな意義をもっている。

はじめに

少子化や核家族化といった社会や家族形態の変容により子どもを取り巻く社会環境が大きく変化し、地域社会における子育ての力の低下を惹起している。その結果、子育ての難しさや育児不安を抱えている家族が増加しており、地域社会における子育て家庭の孤立が問題としてされている。地域社会における子育て家庭のつながりの希薄化や孤立は子どもへの虐待やネグレクト、貧困といった社会問題へもつながる。厚生労働省によると全国 215 か所の児童相談所が児童虐待相談に対応した件数は 193,780 件(令和元年現在)としてこれは過去最多であり、児童相談所における児童虐待相談への対応件数は年々増加している¹。

このような現状において、保育士への新たな役割が期待されている。本来の子どもへの支援に加えて保護者支援や地域の子育て家庭の支援という役割が求められている。具体的に、保育所保育指針の「第 1 章総則(1)保育所の役割」の中には「保育所は…地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うもの」と規定されている。これには、保育士による地域の子育て家庭の支援の重要性が示されているが、地域の子育ての家庭の支援は単に保育所のみではなく、幼稚園とった保育現場も同様(小田 他, 2014)であり、今日の子どもを取り巻く社会問題へ対応の主体として保育者の新たな役割が期待されているといえる。

しかしながら、保育者による地域の子育て家庭の支援には、現実的に 3 つの課題が指摘できる。第 1 に、保育者も当然ながら「労働者(対人援助の専門職)」であることである。今日の保育現場は市場化(垣内 他, 2015)されており、市場原理に基づく勤務時間以外に保育者が地域の子育て家庭のために支援することには限界がある。第 2 に、保育者は地域社会における子育て

て家庭を支援することが求められているが、現実的には日々行われる保育現場での支援以外は手が回らないことや人手不足という現実的な課題もある。第 3 に、保育者の視野の範疇から離れている子どもが多いということである。つまり、子どもへの援助や対応は保育者への期待があるものの、そもそも保育者の労働の場へ及ばない子どもも存在している。

保育現場における市場原理による決められた労働時間以外の支援には限界があり、保育現場での人手不足等といった現実的な問題から、保育者の新たな役割への期待は徐々に高まっているものの、それに関する政策などは矛盾を孕んでいる。又、保育者の視野の「外」にいる子どもへの問題をどのように対応すれば良いのかといった議論も必要である。

保育者による地域社会の子育て家庭の支援の役割は大きな意義をもっているが、それと同時に、市場原理として位置づけられている保育現場から離れた日常生活において、いかに地域の子育て家庭を支援する地域共同体の仕組みを形成していくのが重大な視点であると考えられる。言い換えれば、いかに地域の子育ての環境を変えられるのかという問題意識である。

本稿では、その主体として地域住民の自主活動に注目する。以下、本稿における自主活動の捉え方を示したうえで、地域の子育ての環境²を変えるために取り組んだ具体的な住民の自主活動の実践事例を取り上げる。

1. 「自主活動」への注目

本稿は、地域の子育て家庭を支援する主体として地域の住民の自主活動に注目している。筆者はかつて、ある特定の課題の取り組みが持続性をもつためには「いかに住民の自主活動の仕組みを作れるのか」について検討を行い、具体的な事例から自主活動がもつ意義について明ら

1 令和元年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数<速報値>
<https://www.mhlw.go.jp/content/000696156.pdf>

2 ここで用いる「地域の子育ての環境」とは、「子どもやその保護者が子育てする上での地域住民同士の横のつながりや地域の環境整備」の意味としてとらえる。

かにしてきた (MinGyu CHOI, 2017) (崔 敏奎, 2017)³。その上で、自主活動をどのように捉えるのか、どのような自主活動へ注目するのかについて検討を行ってきた (MinGyu CHOI, 2019)。以下、その検討を簡略に紹介し、その上で、住民の自主活動による子育て家庭の居場所づくりの具体的な実践事例を取り上げる。

Wengerら (2002) は「共に問題を解決し、持続的な相互作用を通して共同のアイデンティティをつくっていく集団」を実践コミュニティとして定義している。しかし、その実践コミュニティがどのような性格として形成されているのかを問わなければならない。かつて、Hansen (1993) は「支配権力は多様な方法で人々を統制し、彼・彼女らへ利益にならない活動に参加させる」と述べた。実践コミュニティにおいても、このような「支配権力」の枠組から活動を行い形成される集団が存在する。この集団をここでは「支配型」と称する。「支配型」と正反対として位置づける集団としては、支配権力から脱走し、新たな主体を形成し、創造する可能性⁴ (Deleuze, 2008/2002) を有する。行政との協働の関係を維持しながらも、公共性を指向し、又、運動と対抗の側面を有している集団である。この性格をもつ集団は、主に「市民運動」が該当するが、「市民運動」は、行政との協働はあくまでも市民運動における資源動員論として利用し、自立志向と運動と対抗の指向が強い。それに反して、本研究で注目したい集団は「行

政との協働と自立志向の性格が強く、必要な場合のみ運動と対抗の性格を志向する団体」として位置づける。本研究ではこの集団を「自主活動」として称する⁵。したがって本稿では、行政との水平的な関係を維持するために努力しているが、「独立的な団体として自発的な活動」を展開し、必要であるなら運動と対抗的な活動を展開する実践コミュニティを「自主活動」として捉える。

2. 韓国釜山市の盤松洞の住民の「自主活動」の事例

本研究で注目したい具体的な事例は「韓国釜山市にある盤松洞の住民の「自主活動」(以下、盤松洞の住民)」である。盤松洞はいわゆる貧困地域であり、教育や公共交通が不便な地域であった。それに伴い地域の治安や子どもの教育環境が大きな問題として抱えている地域であった。しかし、盤松洞の住民はこのような地域の課題に対して住民の「自主活動」の団体を形成し、「子どもの放課後学習支援」、「マウル壁画」「マウル家族紀行」⁶、「バンソン地域子どもの日遊びフェスティバル」等の活動を通して徐々に地域の子育ての環境を変えて行き、地域の子どもや子育て家庭が集まる場所がないことから子育て家庭の居場所としての図書館を自主的な活動を通して設立をした。

盤松洞は、行政といったパワー (権力) から始まった (支配型) のではなく、住民の自発的

3 地域のある課題において行政や市場に委ねる活動は短期的であり、その活動は非常に限定的である。課題に取り組む活動が持続的に行うためには住民の自主活動として展開することが大事であるという視点から具体的な事例として「高齢者の健康づくりにおける自主活動」の事例を取り上げている。その事例から、自主活動を通して健康に対する意識の変革のみならず、そのプロセスから地域への関心の変革のプロセスも生じたことを明らかにし、高齢者の健康づくりにおける自主活動がもつ意義について述べている。

4 Deleuzeはこれを「主体化の線」として表現している。

5 「自主活動でもどのような性格として形成されている自主活動であるのか」について検討を行い、自主活動の類型化を試みている。その自主活動の類型として「支配型」「自主活動」「市民運動型」「フェアトレード団体」「市場型」「民間企業」「補完型」として類型化を試みた。詳しいことは、MinGyu, CHOI(2019) "Social justice and the independent activities of citizens and residents". In Elly Malihah, Tutin Aryanti, Vina Adriany (Eds.), RESEARCH FOR SOCIAL JUSTICE, pp.40-45, London: Routledge.を参照。

6 「マウル」を日本語で訳すると、地域やまちとして訳すことができる。しかし、地域やまちとは、行政区画として使われる場合が多く、「マウル」はそこに住んでいる地域住民が考える「「私たち」が住んでいるところ」といった「私たち」というイメージが強く含まれた概念として使われる。調査においても、地域という表現はあまり使わず、「マウル」という表現を使いながらお話ししていただいたため、本稿では固有名詞としてそのまま「マウル」「マウル壁画」「マウル家族紀行」として表現する。

な活動から始まった事例として、筆者が注目している「自主活動」である。地域の子育て環境をめぐる課題に対する様々な取り組みから、地域の住民が主体となって地域の子育ての環境を大きく変えたのである。

日本においても地域の子育て支援を住民が主体となって活動を展開している事例はある。例えば、保護者と保育者が「共同」で保育所を運営、支えていく「アトム共同保育所」の共同保育実践（NHK「こども」プロジェクト、2003）や社会教育機関である公民館を拠点として子どもと保護者向けのサークルや部局を保護者が自主的に参加・運営し、公民館職員とも横のつながりを維持しながら子育ての孤立から支えあう関係性を構築している「貝塚子育てネットワークの会」（貝塚子育てネットワークの会、2009）等の事例は、地域の保護者が主体となって地域の子育て家庭を支援している優れた事例である。

しかし、本稿で取り上げる盤松洞の事例はこれらの事例とは異なる活動実態として地域の子育て家庭の支援や地域の子育ての環境を変えている。では、盤松洞の住民はどのような活動を展開しながら地域の子育ての環境を変え、子育て家庭の居場所づくりに取り組んだのか。以下、その活動実態を明らかにする。

3. 韓国の地域の特徴と盤松洞の形成

韓国の地域の大きな特徴として言われているのは、地域間の貧富の格差がはっきりみえることである。つまり、韓国での地域間の貧富の格差は、ある地域はお金持ちが住んでいる地域、中間層が住んでいる地域、貧困層が住んでいる地域に分けられ、貧困層に住んでいる住民は少しでも経済的に余裕ができたならその地域から離れようとしているところにある。離れようとしているもっとも大きな理由は、貧乏な人たちが住んでいる地域のイメージや子どもの教育環境や不便な公共交通などから離れたいからである。「この地域を私たちが何とかしよう」ではなく「この地域から出よう」という状況が生まれ、自然に引越しをする雰囲気を作られた

のである。このような雰囲気は子どもへの成長にも大きな影響を及ぼす。

もう一つ地域の問題として、「無関心」な社会があげられる。この「無関心」な社会は、新自由主義政策によってさらに強くなった。資本に対する熱望や生活経済の停滞によって自分や自分の家族の暮らしのためのお金稼ぎだけに集中し、隣の家に誰が住んでいるかもわからない「無関心」な人々が住む地域が増えている社会が生まれたのである。

盤松洞は、釜山廣域市海雲台（ヘウンデ）区の北東方の端っこにあり、人口は3万8千644名（盤松1洞と2洞を合わせて、2020年12月現在）である。盤松洞は、そもそも非常に貧困な地域であった。盤松洞の形成としては、1950年6月25日の北朝鮮の南侵によって勃発した朝鮮戦争で、自分の故郷を捨てて避難してきた避難民たちが南にある釜山で無許可の掘っ立て小屋を作り集落を形成し住み始めた。しかし、1960年代後半の韓国の経済成長や釜山の都市開発政策によって、掘っ立て小屋に住んでいた避難民たちは集団で移動されることになった。その移動された地域の一つが盤松洞である。このように形成された盤松洞は、そもそも貧困であった避難民たちが移住政策で住んでいた掘っ立て小屋の集落から撤去され撤去民になり、貧困な撤去民たちが集中して住む地域社会になった。したがって盤松洞は、そもそも貧困な人々が住んでいる地域であるという他所からの視線や、不便な公共交通、子どもの教育環境の問題、治安や施設面においても不便な地域であった。

そして、1995年から釜山廣域市の隣にある金海市（ウルサン）や蔚山廣域市などへ釜山にある工場の移動の加速によって、工場で働いていった人々や少しでも余裕ができたなら貧困な地域から離れたいという意識を持っている人々が盤松洞から離れて人口は大きく減った。盤松洞は、貧困層が住んでいる地域、子どもの教育環境や公共交通、治安や施設面においても非常に不便な地域として形成されたのである。

しかし、地域の課題を深刻に捉えた何人かの地域住民が、自発的な様々な自主活動を通して

地域の子育て環境を大きく変えたのである。

4. 盤松住民の「自主活動」における子育て家庭の居場所づくりの実践⁷

1) 活動の契機

盤松洞の住民の活動は、地域の子育ての環境を変えようと考えた5人が集まることから始まる。当時、盤松洞で個人病院を運営していた医師Aさんは、盤松洞が故郷であった。中学校まで盤松洞で暮らして、高校は他の地域から通い、大学も他の都市にある医大へ入学したため盤松洞から去った。医大を卒業し、結婚して妻と1995年8月に盤松洞に戻り、小さな病院を開業した。しかし、以前と変わらない不便な交通、子どもたちの教育環境や貧困層が住んでいる地域というイメージ、地域の人々の生活も前と比べたら何も変わらなかった。そこでAさんは、自分の故郷であるこの地域を何とかしなければならぬと思っていた。そのような考えを持っているうちに、地域活動に興味を持っていたBさん⁸と、労働運動家出身で子育ての悩みをもっていた夫婦、地域の社会福祉士が集まり、5人で1997年に地域活動を行うことになったのだった。

最初に行った活動は、「ドゥプロソシクジ」という印刷物を作成、配布することであった。この印刷物は社会福祉士が一人で行っていたものである。「ドゥプロソシクジ」の内容は、盤松2洞の永久賃貸住宅に住んでいる独居老人やお父さんがいないので自分がお父さんの役割をしなければならない少年少女たちの零細民の話や後援者の名前が書いてある印刷物であった。5人が一緒に「ドゥプロソシクジ」を作り始めてからは、その内容を後援者や零細民の話のみではなく、盤松2洞の写真や地域の情報等を含んだ情報誌として作成し変えた。「ドゥプロソシクジ」活動は、盤松住民の地域の子育て環境を変えるために行った最初の活動である。「ドゥプロソシクジ」の内容が増えたことによって、印

刷費用も増えたが、費用は活動をしながら集まった少数の人々からの後援金や「ドゥプロソシクジ」に載せる広報費で賄った。

2) 子どもの放課後学習支援

盤松洞は共働き家庭も多く、当時は治安も悪く、子どもの教育環境も悪かったという。そのため、親が仕事から帰ってくる前まで子どもたちの放課後学習支援を行った。塾など行けない子どもや親が帰ってくるまで一人にいる子どもへ勉強を教えたり、一緒に宿題をしたりする活動を行ったのである。このように子どもたちへの放課後学習支援を行うことによって、徐々に地域の子育て家庭の支援活動が始まり、これらの活動へ興味・関心ができた子育て家庭が徐々に増えていった。

3) 「盤松を愛する人々」の設立

当初5人が中心で行ってきた地域の子育て家庭支援は、「ドゥプロソシクジ」や子どもの放課後学習支援の活動によって、活動を一緒にする住民が少しずつ増えていた。それによって、団体を作る意識や必要性が芽生えたのである。団体の創立準備は、毎週中心であった5人が集まって団体の名前と会則を決め、1998年6月27日に25人が集まり「盤松を愛する人々」という団体が創立された。

4) マウル壁画

盤松洞の地域の子育て家庭の支援や子育て環境を変える活動として大きく知らせたのがマウル壁画活動である。盤松洞は道が汚い。子どもや住民たちがよく通う道の壁が汚いことから、地域の人々に声かけて家族単位で一緒に壁画を描く活動を行った。

活動を行っている住民（主に子育て家庭）が釜山市内にある全ての壁画の写真を取って比較分析を行い、図案を描いた後には、専門美術塾に行きアドバイスなどを聞くなど、家族単位

7 本稿は筆者が2013年3月と8月に実施した盤松洞での調査のデータをもとに作成したものである。

8 調査当時の「希望世界」の会長。「希望世界」は、本稿で注目している事例の団体名。

で壁画を描く準備を進め、25家族50余名が筆とペイントを使って地域に壁画を完成した。地域に壁画を描くことにより汚いイメージであった道がきれいになり、学校を登下校している子どもたちが最も喜んでいて、又、壁画の前を通る車のスピードも落とすようになった。これをキッカケに地域のいろんなどころで家族単位で壁画を描く活動が続けて行われた。

家族同士と一緒に地域の壁画を描く活動を通して、地域の子育て環境の美化や、子育て家庭同士でのつながりができるなど、地域の子育て環境を変える大きなきっかけとなった。

5) マウル家族紀行

マウル家族紀行は、子育てしている家族があまり家族旅行に行く機会がない事情から行った活動である。しかし、単なる旅行ではなく何かを学び、体験できる紀行として企画を行った。多くの家族がマウル家族紀行に参加をし、大きな反応をみせた。その後も、自然や歴史、文化遺産などといったテーマを毎年設定しマウル家族紀行を行っている。

6) 盤松地域子どもの日遊びフェスティバル

「盤松を愛する人々」の一番大きな行事は、1999年5月5日に開催した「第1回目 子どもの日遊びフェスティバル」である。最初、この行事を企画するのに一番の問題は予算であった。予算を確保するために住民一人一人に会いながら趣旨を説明し、足りない部分は幼稚園や東釜山大学・幼児教育学科、盤松聖堂など様々な団体へ趣旨を説明しながら協力を得て開催することができたのである。「盤松地域子どもの日遊びフェスティバル」は、初めて他の団体と協力して行った活動である。この活動は子育て家庭向けの行事が地域にないことから行った活動であり、地域の他の団体との初めて協力しながら地域の子育ての環境を変える活動として大きな意義をもつ。

7) 良いお父さんになるための集まり

初期の「盤松を愛する人々」は主婦が中心で

あった。しかし、会議や行事の準備を行う上で、夫が会社から夕方家に帰ってくるのであまり参加できない主婦が多かった。そのため、当時の活動を中心的に担っていた医師のAさんが、夫たちへ地域活動について説明を行い、その後、マウル壁画やマウル家族紀行の活動などを通して、地域のお父さんも地域の子育ての環境を変える地域活動へ徐々に参加することになった。その結果、地域の力仕事や子どもたちとキャンプへ行く計画を立てるなどの活動を行う「良いお父さんになるための集まり」というサークルができたのである。

8) 子育て家庭の居場所－「ケヤキ図書館」の設立

「盤松を愛する人々」は、地域の子育て家庭の支援や子育ての環境を変える活動を展開する過程の中で、地域の他の団体と共同で活動を展開したことをきっかけに「盤松を愛する人々」の団体名は「盤松」という限定的なイメージを持っていることから、2005年度に団体名を「希望世界」に変更した。そして、その2年後に子育て家庭の居場所づくりとして「ケヤキ図書館」を設立した。

地域に子育て家庭の居場所としての図書館を設立しようという意見が出たのは、年末にある「希望世界」の総会であった。しかし、地域の住民の「自主活動」により地域に図書館を設立することには、様々な問題があった。一番大きかった問題は、図書館を設立するのにかかる資金であった。この問題について地域住民は様々なアイデアを出し、「盤松地域子どもの日遊びフェスティバル」で行ったように地域の様々な団体や住民に会いながら、「マウル」図書館の設立趣旨の説明を行った。盤松洞にある学校の校長先生や幼稚園の院長に会って趣旨を説明し、学校や幼稚園を通して各家庭に「ケヤキ図書館」の趣旨や後援について書いてある案内文の配布も行った。又、地域の行政機関や福祉施設等へ声をかけるなどを通して後援金を集めた。そして、「レンガ一つ寄金運動」も行ったが、これは、レンガ一つが1万ウォン（約930円）とい

住民の「自主活動」による子育て家庭の居場所づくり
—韓国釜山市の盤松洞の事例を通して—

うことで、その一つに当たる値段を寄金として出す寄付運動であった。「ケヤキ図書館」が開館する前までに、約4,000余名の住民が「レンガ一つ寄金運動」を通じて後援を行った。

地域の学校や幼稚園、各種機関や団体、そして住民たちが協力して、2007年10月に「ケヤキ図書館」が設立され開館した。

「ケヤキ図書館」は、地下1階から地上4階の建物である。地下1階は小さなカフェと事務室がある。1階は、保護者が子どもに絵本読み聞かせをするなど、保護者や子どものための空間として設けられた。1階には授乳室もある。2階は、主に子どもたち向けの本が配置されている。3階は、中・高校生のための空間であり、4階は、家族単位で映画を見たり、小さな行事を行ったりすることができる空間として設けられた。

それまでの活動をふりかえり、Bさんはインタビューで以下のように語っている。

B：…成果というより、私たちは毎日悩みます。その悩みというのは、どうしたら住民たちにもっと深く入れるか、どうしたら一緒に活動できるか。また、「マウル」で育つ子どもたちに誇りを感じさせたかったです。

「ケヤキ図書館」は、地域の子育て環境を変えたいという地域住民の悩みから始まった15年間の「自主活動」の結果として、地域の子育て家庭の居場所であり、住民や子どもに誇りをもつものとして位置づけられているのだ。

おわりに

本稿では、地域の子育て家庭を支え、地域の子育ての環境を変えたいと思う盤松洞の住民の「自主活動」の活動実態を明らかにした。当初5人から始まった活動は地域の子育て家庭や諸団体への参加や理解・協力を得ることにより、子育て家庭の居場所として図書館まで設立する活動として展開をしていた。

本事例から住民の「自主活動」による子育て家庭の居場所づくりの特徴として、以下の3点を挙げるができる。

第1に、地域の子育ての環境を変えたいという共同の問題意識を共有できる実践コミュニティ（「盤松を愛する人々」・「希望世界」）を作ったことである。

第2に、家族単位で参加できる活動を中心として展開したことである。本事例からは、「マウル壁画」や「マウル家族紀行」、「良いお父さんになるための集まり」の活動がこれにあたる。特に、マウル壁画の活動は、地域の子育て環境の美化や地域の人々へ活動の存在を認識した大きなきっかけとなり、参加した子育て家庭同士で支えあう関係が構築するなど、地域の子育ての雰囲気を変えた活動である。

第3に、実践コミュニティ内の「自主活動」を超え、地域の住民や地域の諸団体と連携を組みながら活動を展開したところである。具体的に、「盤松地域子どもの日遊びフェスティバル」で行った地域の幼稚園や大学等といった諸団体との協力、地域住民への趣旨の説明といった活動が子育て家庭の居場所である「ケヤキ図書館」の設立への土台となった。特に、このプロセスから地域の保育者も一人の住民として関わっていくところは注目に値する。

以上確認したように、地域の子育て家庭の居場所づくりや地域の子育ての環境を大きく変えたこれらの活動は、住民の「自主活動」として展開したところに大きな意義もっている。まさに、本事例は住民の「自主活動」による子育て家庭の住みやすい「まちづくり」実践であるといえる。

しかし、本研究は事例の活動の実態を明らかにし、この活動の特徴を見出す段階へ留まっているところに限界がある。したがって、この事例から今後の課題として3つをあげたい。

1つ目は、活動を展開する過程から生じる葛藤や課題をどのように乗り越えたのかを明らかにすることである。地域の子育ての環境を変えることや居場所づくりのプロセスには、様々な葛藤や課題が生じることが想定される。それら

をどのように乗り越えたのかを明らかにすることに1つ目の課題として設定する。

2つ目は、「自主活動」へ参加を通してどのように意識が変革したのかを明確することである。実践コミュニティへの参加のプロセスは、様々な「モノ」との相互作用から新たな共同のアイデンティティを構成(レイヴ&ウエンガー, 1993)していき、それに伴う意識の変革が生じる。地域の子育ての環境を変えたいという問題意識から、地域の他の団体と協力するプロセスを経て、子育て家庭の居場所をつくり、そして現在に至るまでどのような相互作用から住民の意識の変革が生じたのかを明確にしていかなければならない。

3つ目は、行政との関係をどのように構築しているのかである。筆者は、地域の子育て支援の主体は地域住民の「自主活動」によるところに大きな意義を持っており、その際の行政は住民と水平的な関係としてかかわるべきであるという立場である。しかしながら、盤松洞の住民は行政との葛藤の様子をみせていた。

B:「行政との関係を仲良くする必要はある。」と思います。・・・行政とは、もし、行政が私たちに何かを要求すると私たちがやりたい方法と間違っていないなら協力したいと思いますが、まず行政からのその要求がないですね。・・・今私たちが考えている釜山の行政の問題は、今、多くの地域で「まちづくり」をしています。行政がその地域とパートナーになると、行政は自分たちがしたいことだけするし、自分の成果、自分の実績だけ考えています。今まで全部住民がしてきたものなのに。最初から「まちづくり」に取り組んでいた住民と行政との考えや方向性が違うのです。・・・また、私が今まで活動をしてみたら、個人的な考えですけど、お金がかかる部分は行政が支援して欲しいです。住民たちが税金をちゃんと払いながら共同体に取り組んでいるのに、行政の人たちは自分たちと考えが違うからといって支援もしてくれない

し、私たちは、私たちに税金も払いながら地域活動をしなから、また住民が自費で地域活動をするし。「マウル」をもっと住みよくなる、お互いに学びあって成長する、そんな人々を育成して、地域活動して住みよい「マウル」へつくるのは私たちの仕事で、その以外にお金がかかる部分は行政が支援してくれるのが当然なことだと思います。ただ自分たちと考えが違うから何もしてくれないというのは、それはだめだと思っています。

このインタビューの内容から、盤松洞の住民は行政と良い関係を構築しながら「まちづくり」活動を展開したい気持ちを表しているが、行政との関係を上手に構築していないことが分かる。

したがって、その後行政との関係をどのように構築していったのかを明らかにしていくことを3つ目の課題として設定したい。

<謝辞>

お忙しい中フィールドワークの案内や活動の詳細のお話しをいただいたBさん、「希望世界」の皆様にご心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- 小田 豊, 柏原 栄子, 笠間 浩幸 (2014)『保育者論〔新版〕(新・保育ライブラリー—保育・福祉を知る)』, 北大路書房。
- 貝塚子育てネットワークの会 著 (2009)『うちの子よその子みんなの子一本音の付き合い、だから20年続いている』ミネルヴァ書房。
- 垣内 国光, 川村 雅則, 小尾 晴美, 奥山 優佳, 義基 祐正 (2015)『日本の保育労働者—せめぎあう処遇改善と専門性』, ひとなる書房。
- 崔 敏奎 (2017)「高齢者の健康づくりにおける自主活動と学び」, 東北大学大学院教育学研究科研究年報 第66集・第1号, 93-116頁
- レイヴ, J & ウエンガー, E, 佐伯 胖 訳 (1993)『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書。

NHK「こども」プロジェクト 著 (2003)『裸
で育て 君らしく—大阪・アトム共同保育所』
NHK出版.

Hansen, T.L. (1993) What Is Critical Theory? An
Essay for the Uninitiated Organizational
Communication Scholar. Paper presented at
the Speech Communication Association of
America Convention in Miami.

MinGyu CHOI (2017) "Community Participation
and Health Promotion for Senior
Citizens", Advances in Social Science, Educa-
tion and Humanities Research (ASSEHR), At-
lantis Press, volume 88, pp.77-82.

MinGyu CHOI (2019) "Social justice and the inde-
pendent activities of citizens and residents"
. In Elly Malihah, Tutin Aryanti, Vina Adri-
any (Eds.). RESEARCH FOR SOCIAL JUS-
TICE, pp.40-45, London: Routledge.

Wenger, E., McDermott, R., & Snyder, W. M.
(2002) Cultivating Communities of Practice:
A Guide to Managing Knowledge, Harvard
Business Review Press.

ドゥルーズ (2002) /バク ジョンテ訳 (2008)
ドゥルーズが作った哲学史. 韓国: イハック
サ (들뢰즈 (2002) /박정태 역 (2008). 들
뢰즈가 만든 철학사. 이학사. Deleuze
(2002). L'île deserte et autres textes. Minuit,
Inc.)

令和元年度 児童相談所での児童虐待相談対応
件数<速報値> [https://www.mhlw.go.jp/co-
ntent/000696156.pdf](https://www.mhlw.go.jp/content/000696156.pdf)

崔 敏奎